

## 御坊さん

## 英賀御堂と

## 亀山本徳寺

流通科学大学教授 大谷 昭仁

## はじめに

英賀は姫路市飾磨区に存在している。御堂とはその地にあつた仏堂の尊称である。かつてこの地に向宗の拠点があり、交易都市として栄えたが、その痕跡は既がない。

英賀門徒に先祖をもつ歴史作家・司馬遼太郎は「播磨灘物語」でこの幻の都市を紹介した。近年、五木寛之が「百寺巡礼」のなかで、中世のフィレンツェに相当する自治都市が日本にも存在していたことを感慨深く語っている。「英賀御堂」は歴史的ロマンを呼び起こす格好の題材に違いない。

実際、姫路市内には東西本願寺系の寺院が百五十ヶ寺も存在し、地元住民はその過半が門徒である。この突出した宗教地勢が、かつての寺内町英賀の存在を雄弁に物語っている。とりわけ、英賀時代の什物を所蔵し、そのルーツを間違いない「英賀御堂」にもつ寺院が今も姫路市亀山に存在している。

年刊 『御坊さん』 第10号

平成 18年 8月

発行 亀山本徳寺・本徳寺廟所墓地管理部

姫路市亀山三二四・35-0242

編集 亀山本徳寺・真宗文化研究室

ここでは、近年発掘された資料や海民の研究成果を踏まえ、歴史ロマンの幻想に浮かぶ「英賀御堂」の顛末をいままでの語り部とは多少異なる視点から読み解いてみよう。

## 蓮如教団の西国への進展

まず、本願寺の西国への進展を見直しておこう。一四七五年、蓮如が吉崎を退去し、河内出口・摂津富田を中心に布教伝道を始めたころにはじまる。このころから近畿各所に向宗の寺内町が建設され、蓮如の真宗再興への熱いおもいは各地の多様な一向衆に決定的な方向を与え始めた。その契機となったのは、一四八一年、仏光寺・経家が蓮如の腹心の協力者として本願寺に帰参し、興正寺（仏光寺の旧名）・蓮教を



亀山本徳寺中宗堂安置

蓮如上人を安置した中宗堂は上人が企画した宗門拠点、吉崎・山科・亀山（英賀）にのみ現存している。石山が今にあれば、ここにも当然安置されたはずである。これらの中宗堂（蓮如堂）は、江戸中期頃、ほぼ同時期に建立された。

名乗ったことである。すでに、興正寺系の教線は大和・紀伊・摂津をはじめ、中四国・九州各地に先行しており、この教線の上に本願寺への積極的な系列化が進められていったのである。

興正寺系の寺院・僧侶による西への進展のなかで、蓮如は本願寺の西国方面の拠点として播州英賀の重要性を見抜いた。一四九〇年ごろに、御堂衆の一人下間空善（法専坊釋空善）に英賀開教を命じた。中世の御堂衆とは、寺持ちとして自立せず、常に宗主に近侍し宗主の手足となって働く、いわば蓮如の影武者のような僧である。従って、宗門内での御堂衆の発言・行為は蓮如のもと見なされるほど影響力をもつものであった。蓮如には四人の御堂衆がいたとされるが、その新進気鋭の若手筆頭が播磨の出身とも言われる空善であった。

『空善聞書』に蓮如の母捜しの話がある。この話は空善記九九条の「明応七年夏より云々」と云う記事の次に記載されているため、一四九八ごろと推察される。この前年石山坊が完成しており、全国的な興正寺寺院の本願寺系列化の動きのなかで、すでに西日本への本願寺の進展を目指す拠点として播磨の英賀が重要視されていた。従って、蓮如の母親探しは教団の西国進展の情勢下に飛び出した話である。このことが英賀開教の動機ではない。

## 英賀寺内町の形成

播磨国は、守護赤松氏の支配にあつたが、応仁の乱以後、その領国化は弱く、国人・国衆など土豪の支配による割拠状態にあり、英賀は既に、伊予河野氏の傍系とされる三木氏の実質的支配にあつた。三木氏は讃岐二郡をも領有しており、広く播磨灘の海民を統率し英賀の海港を保持するに至って、周辺海域に強い影響



寺内町英賀は吉崎・山科・石山に続き最後に本願寺が自主的に開発した寺内町である。これら先行の寺内町に共通する環濠化された自治都市であり、交易機能を備えた当時藩州では屈指の民間都市として出現した。

力をもった海の統領と推測される。この時代の本願寺門徒は、百姓（農人）よりも、河川や海に生活の場を持ち、警護・交易・回船を専業とするワタリと称する流通・商工業者が中心であったことを考えると、かれらを配下におく三木氏は本願寺と馴染みやすい状況にあったと思われる。信仰を別にしても、自ら本願寺の門徒となること、配下の海民を掌握し、交易上の便宜を得て、海を含めた領域の支配を可能にする為の必要な条件であったはずである。

英賀の在地組織については、名主的階級（例えば、百姓奥村次郎工門の道場）のものや、坊主等によって道場（寺院に近い集会所形態）が営まれ、その下に、講（例えば、西福寺の僧鉦鐘の念仏講）がそれぞれ自律的に組織されていた。また、六人の英賀門徒代表、英賀三ヶ村を代表する十一人衆

等の存在があり、地域を代表する複数の集団があったことが分かる。英賀長衆は、すみや甚兵衛・御厨五郎左衛門・市場与三兵衛・英賀徳正などで、英賀代官の支配下にあった富裕な交易者であった。これら在所組織と相まって、本願寺サイドの組織として寺院群（六坊・十住・四ヶ道場など）が存在し、全体が「英賀御堂」（英賀本徳寺）に法脈関係をもって集約されていた。

しかし、この時代の門徒集団は明確な命令系統をもった組織的統一はなされておらず、専ら一味同心的な地縁的共同体が寺を中心に形成されていた。共同体の意志決定は複数の長衆の合議にはかられ、阿弥陀信仰はかれらの共有する精神基盤を担っていたと思われる。

「英賀御堂」をはじめ寺内町の町割りなどの構成は不明であるが、町数は四十八町で約六千人〜七千人の人口であったと推定されている。地理的には夢前川の河口扇状地に建設された五十五万平米の環濠都市で、播磨灘に面した港湾機能をもっていたと思われる。水尾川と夢前川に挟まれ、北は湿地帯を利用した堀と土塁で囲い、十箇所ほどの出入り口が設けられていた。

町中には長衆の館が建ち並び、夢前川縁に、英賀御堂と称せられた東向きの本堂を中心に寺内



英賀御堂降棟飾瓦が現存しており、寄進者名・製作年・瓦大工名が記銘されており、破壊された寺内町の貴重な遺品となっている。本願寺が門跡に指定され、本徳寺が院家となった折、御堂の修理ないし新築が行われた可能性が高い。

寺が甕を運んでいたようである。

「英賀御堂」の建設は一五二二年から着手され一五一五年に完成したようであるが、木材は河川を通して宍粟神部あたりから調達したらしい。英賀は雑多な交易・商工業者の町であるため、寺内の大工・鍛冶師、鋳物師、瓦大工、石工、皮革業者などの手によって自前で維持されたようだ。「英賀御堂」の大きさは南北九間、東西七間とされているが、龜山本徳寺に現存する英賀御堂降棟飾瓦の大きさから推定して妥当と思われる。

### 英賀の本願寺直営化

播磨の初期真宗化にあたっては、播磨六坊の役割が持出されることが多い。この六坊について由来の詳細は、それぞれの寺伝に譲るとして、開基以前は、これらの寺院群は興正寺（旧仏光寺）系の教化の強い影響下にあった。経豪帰参の影響で、これらの寺院・道場の本願寺への系列化が急速に進められたことが、六坊がほぼ同時期（一四九〇年前後に集中）に蓮如より本尊などを下附されている事からも知ることができる。さらに、一向宗以外の寺院としては天台宗や禅宗などに起源を持つ寺院も前後して本願寺の系列に転入している。この時期を捕らえ、蓮如の意向を胸に御堂衆・空善が本願寺の直轄拠点を造作すべく、送り込まれてくる。

空善の英賀での活躍の詳細は不明であるが、はなはだ説教が達者で多くの同行を導いたと言われている。空善の道場は、一四九〇年ごろ当初人丸町に開設され、後に東苅屋（人丸町から西南方二百米）に移転した。しかし、すでに、摂津多田門徒に属する仏光寺系の僧侶・祐全の文明道場が同地に存在していたとされ、文明年間（一四六九・一四八六）には仏光寺系



の教線が張られており、当時の本願寺系と仏光寺系の微妙な関係を窺うことが出来る。しかるに一四八一年の仏光寺・経蒙の帰参は英賀にも強い影響を及ぼし、本願寺への傾斜は加速され、空善が英賀門徒衆のリーダーシップをとることになったと推測される。

しかし、基幹となる教義の上では、後に、本徳寺実円が『浄土見聞集』『真宗用意』『諸神本懐集』等を書写保存しているように、存覚系の聖教、つまり仏光寺に大きな影響を与えた教義が在地門徒の信仰の核にあつたようだ。近代の普遍主義に依存した教学とは大きな開きがあることに注意したい。

空善の功勞により、英賀は本願寺教団の重要な拠点となり、備前の本願寺化をも進めていくことになる。さらに、英賀からの使僧は安芸・九州にもおよび、西国への本願寺教団の進展を促す橋頭堡として、戦略的に重要度を増してくる。この旧仏光寺系寺院・坊主の本願寺への系列化は安芸・讃岐においても顕著で、本尊下附などにより、積極的に光明本尊が本願寺の本尊に置き換えられ、名帳・絵系図などは隠され仏光寺色を短期間に塗り替えていった。

一四九九年に蓮如は娑婆との縁を切るが、その意向は実如に受け継がれ、一五一五年には本願寺直管の本徳寺（英賀御堂）が建立され、本願寺から実如の子実円が下向した。この際、盛大な法要が催されたようで、在地の英賀長衆との対面が行われ、名号の下附、仏供田の上納、下従の得度などが行われた。当時、実円は三河・本宗寺の住持職にあつたため本徳寺と兼任ということになり、本願寺の人事采配の複雑さを伺うことができる。

後に一門・一家衆制が確定され、人事規定が明確になったようである。しかし、実如が一五二五年に没し、後継者証如が十歳の幼小にあつたため、実円はその後見役として、大半は本山詰めを余儀なくされた。英賀に滞在していた顯誓の『反故裏書』からは、大坂・山科との往来が頻繁であつたことを伺わせる。

実円入寺以来、英賀は、吉崎、山科、石山に見られるような本願寺地内町として生きること宿命付けられた。このような英賀を拠点とした内陸部への一向勢力の進展は、在来の既得権益を侵すことになり、当然旧支配勢力との軋轢を生み出した。本願寺実如が守護赤松氏に対して播磨国内の布教の寛容を取り付けるために名馬を贈答したことは有名である。さらに、書写山僧衆が「英賀御堂」に押し寄せ梵鐘を強奪、法隆寺鷗莊東保村にある一向宗念仏道場が莊令により検断、八正寺、光明寺・華嚴寺の僧徒や社家による英賀打ち壊しがたびたび起こっている。このような危機を乗り越えて中世都市英賀は、内海を通して大坂本願寺と強い連繫を保ちながら屈指の交易都市として急成長した。英賀以外にも那波、越坂、家島、岩屋など小規模な津や泊が開港され、一向サイドの船舶の少ない播磨灘で、芸予、塩飽から大坂にむけての交易路の中継基地として大きな役割を果たしていたと推測される。

### 本願寺ネットワークの性格

各地で勢力を顕在化させた門徒集団はしばしば一揆を構成し支配権力と衝突してきた。加賀のように一國を領国化した地域もある。そのため、中世の本願寺は戦国大名と同列に見なされることが多いが、それとは性格を異にしている。一つは本願寺の組織は複数の領国に点在した非課税特権都市を交易要所に保持し、領国制のような一元的な租税制度は持つておらず、商業

交易における付加価値的利潤による経済を基礎にしていた。一つは、本願寺一門を構成する門徒は自参した流通・商工業者が主な構成員で、地域ごとの独自性と自立性を保持していた。三つには、知行制度や国内法がなく、命令系統を明確にした専門的軍事部門を常備せず、武力行動は専ら門徒の臨時的兵力に頼っていた。四つには、その財源の確保は門徒の自発的懇念に任されており、これによる資本の集中と運用は仏法領の特権的維持を可能にし、構成門徒の経済的行為の利便性に還元されていた。ここには近代資本主義経済の萌芽すら見られる。

次に石山戦争で躍起された一揆の性格を一考しておきたい。戦の前半は、近畿を中心に琵琶湖周辺から北は越前・加賀におよび、東は近江をへて三河に続くエリアにおいて展開された。一方、後半部の西国戦線では陸よりも瀬戸内海という海の支配権争いが勝敗を決する要因であつた。

しかし、海の一揆は証拠を残さない海という性質上ほとんど知られていない。英賀一揆は海の一揆の性格を色濃くもつものであつた。その上、完全に解体されたため、その歴史的存在すら希薄である。

そもそも、寺内町を構成単位とする本願寺全国ネットは海や河川を媒介した相互交易機能に本質的な特徴があつた。従って、中世英賀は、西国に張られた交易網の視点から理解されるべきであろう。一つは内海を支配した海の統領村上氏。二つには西国の覇者毛利氏。三つには石山本願寺である。この三者はいずれも阿弥陀仏信仰をその精神基盤として共有し、互いの連繫を専ら海にもちながら機能した集団であつた。その同盟体は、天下布武による一元的支配を目論む信長の敵対者として必然的に顕在化したものである。

## 英賀の攻防

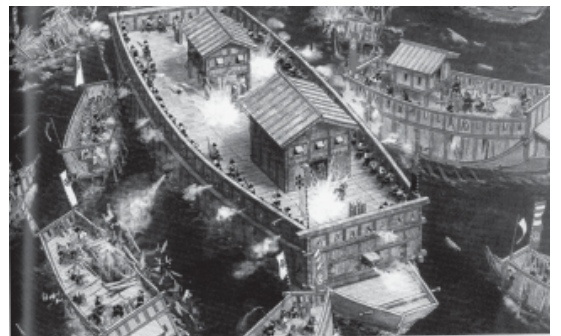
一五七〇年九月、信長による本願寺立ち退きの要請を拒否した顕如は、諸国門徒に蜂起を指令、十年にわたる石山戦争を開始した。この時、顕如より本徳寺をとおして三木通秋に出兵の要請があり、三木源右衛門専時以下分支家人二百余人、一向信徒五百余人、地侍三百余人ならびに兵糧米三千俵を以て参戦し、多くの戦死者が出た。この痛手は英賀衆にとつては大きく、以後、後方支援を余儀なくされた。一五七七年には毛利軍勢が上陸、英賀の防衛を強化している。

信長の本願寺ネット攻略は一進一退しつつも、三河・越前・近江・伊勢長島の陸一揆を壊滅させ、本願寺包囲網は徐々に狭められていった。一五七六年以降、東方陸からの援軍は絶たれ、本願寺は籠城を余儀なくされ、戦局はもっぱら海に遷った。つまり、瀬戸内海の制海権の争奪が勝敗を決することになったのである。

この危機を打開すべく本願寺の同盟毛利氏は、一五七六年七月に信長の水軍（摂津・和泉）による包囲網を大阪湾で撃破し、本願寺への物資の供給を成功させた。この作戦行動に英賀は中継基地としての役割を担っていた。しかし、その主力部隊は海の一方向門徒・三島村上一族であったことは言うまでもない。村上一族はその支配を芸予諸島に置く自立性の高い海の統領で、毛利氏が一向宗を尊重していたこともあり、毛利水軍の主力として活躍していた。しかし、翌年には信長が九鬼水軍に鋼装船を新造させて、大坂木津川口の戦いで毛利水軍を大敗させた。これ以降、内海の制海権が信長方に移ることになった。これによって、秀

吉の播磨攻略が可能となったのである。

一五七八年、秀吉は書写山・十地院に陣を張って、本願寺・毛利方にあった三木城を別所長治の自害をもって潰し、播磨の一向宗の拠点英賀を眼下にとらえた。既に、英賀衆は別所氏への支援、織田



木津川口の海戦の予想図  
中央に見えるのが信長の鋼装船で大砲を備えて一向の水軍を撃破している。一向の主力村上水軍は隊列を組んだ小型の安宅船を巧みに操りながら敵船に炮烙玉を投げつけて撃破する戦法を得意としていた。

方小寺氏との戦闘で消耗し、一五七九年、顕如から英賀衆に届けられた檄文に呼応できる戦力はすでなかつた。英賀攻略は一五八〇年四月に開始され、もはや孤立状態にあった英賀寺内町は、秀吉の寝が入り策略も功を奏し、極めて短期間に崩されたらしい。その四ヶ月後、父・顕如の講和派と対立して最後まで籠城を続けた教如は大坂本願寺に火を放ち、ここに一世紀にわたって続いた中世本願寺ネットは終焉を迎えた。

## 英賀の解体と戦後処理

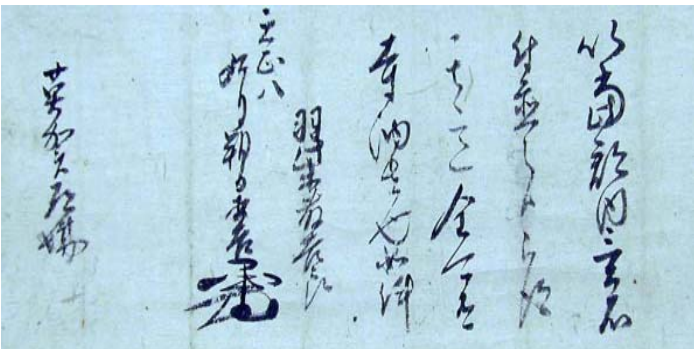
秀吉の一向宗に対する処置は信長と異なり、懐柔に近いものがあつた。英賀の武装解除の後、秀吉は直ちに「英賀御堂」に入り、安堵の意向を表明したと言われている。本徳寺主顕妙尼（顕如妹）の意向をもって寺侍・加古浄秀や聖安寺・祐教などの重臣の確な対応により、「英賀御堂」の消滅は免れたと伝えられている。一五八〇年九月には羽柴藤吉郎の

名で「英賀道場」宛てに安堵の判物（寺領寄進）が出され、二年後に、寺院だけが龜山に移された。このときに建造物が移築されたか定かではない。

しかし、秀吉は、英賀の自治都市としての存続を許さず、替わって城下町姫路を立ち上げた。残留した英賀の門徒の多くは城下龍野町に移され、土地持ちとなつて土地に固定されたものも多い。さらに、英賀の既得権益を認め、楽市・楽座すら許可している。一方で、厳格な検地によって、土地の所有を明確化し、租税制の整備をおこなつた。半農半兵であつた門徒から武器を接収して、兵農分離を徹底した。

これら一連の処置は、寺内町のもつ、寺と門徒が一体化した運命共同体としての自治都市構造を解体し、同時に門徒の持つ生産力を低下させることなく剰生産物の一元的収奪をめざす近世封建体制への移行を速やかに行う効果的な方法であつたと云える。

この播州における戦後処理をモデルに、大坂本願寺の解体がすすめられ、大坂寺内町は大坂城下町へと変貌した。一五九二年には本願寺だけを大坂から切り抜き、京都七条堀川に安堵された。今に続く京都本願寺の始



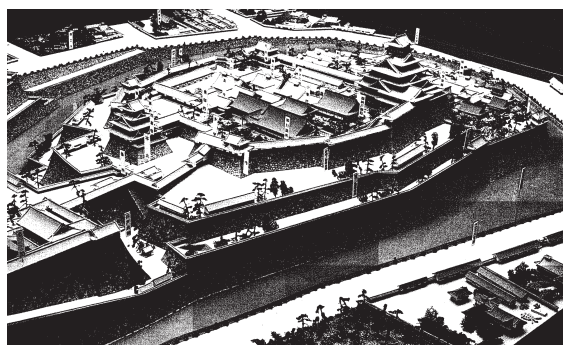
秀吉の英賀道場（英賀本徳寺）宛の判物・龜山本徳寺蔵



まりである。ちなみに、京都の町衆は法華宗の衆徒が大半をしめていた。

## おわりに

龜山本徳寺には今も「英賀御堂」の法物類や遺産が保存されている。



石山本願寺跡に建設した秀吉の大坂城の再現模型。寺内町の基本的構造を生かし、一向宗のもつ都市建築の技術も動員されたと推測される。

太鼓楼がその一つであるが、町の出入口に櫓を組み武器庫を兼ねた見張台である。最上階には大太鼓を備え敵の攻撃を町衆に知らせたらしい。近年、寺の蔵から三木氏寄進の「英賀御堂」の降棟飾瓦が発見され、今の瓦師をつならせた。(2ページ飾瓦写真参照)英賀には瓦職人も多数あつて、一般に敷かれる棧瓦は彼らの発明といわれている。その他、三木氏寄進の梵鐘も残されている。このように、寺内町の開発・維持にあたって、武具・造船・土木・建築を下支えしたのは各種製造や流通に携わる人々の存在であった。彼らの生産技術や商業技術は、近世の城下町に生かされたに違いない。中世末期から近世初期にかけて日本の人口は一千万から三千万に急増するが、その背景となる生産力の向上は、一向衆のもつ技術の開発・改善が多く寄与していると思われる。

最後に、触れることが出来なかつた事に、キリスト教宣教師の活躍がある。信長は西洋に対する

好奇心と南蛮貿易に目を付け、イエズス会の布教・伝道を容認した。彼らは毛利氏の海上封鎖された瀬戸内海を往来し、敵対する本願寺に重大な関心を示して、その勢力の巨大さを派遣国に報告している。後継の秀吉も個人の信仰には不干渉であつたため、本願寺の解体によってキリスト教信者は激増し、一六一〇年ごろには七十万人を超える国内最大の宗教セクトとなつた。後に、危機を感じた為政者の禁教令の発動を促すことになつた。ちなみに、新都市姫路を誘致した、秀吉の懐刀、黒田孝高(官兵衛)は熱心なキリスト教徒でその洗礼名をドン・シメオンという。

## あとがき

この小論は、著者が「御坊さん」平成一八年号に掲載するにあたりBonnie バンカル No.82008年夏号(季刊)発行所(財)姫路市文化振興財団発売 神戸新聞総合出版センター「英賀御堂と龜山本徳寺」P.60-61に掲載されたものを再編集したものである。

播州の浄土真宗の歴史は十分に発掘されているとは言いがたい。しかも、多くは江戸時代に着色された理解が定説化しているようである。

寺や門徒の概念も中世と近代では隔絶の差違がある。現在の寺の常識は中世の非常識と言つてよい。従つて、寺や門徒が現在の成り立ちのまま過去に遡及することなどあり得ない。中世に誕生した伝統宗門も、近世・近代と時代を経て変化し、戦後は時代社会との整合性を維持するために組合組織となつてしまった。運命共同体としての寺と門徒も、近世には分離され、寺檀制度のもとに檀家寺と檀徒に変貌し、近代以降現代に至つては顧客となつてしまった感がある。しかし、未だ地方都市にはかつての真宗の原型が残つていてその風情を探ることができる。本徳寺などはそのような寺の一つである。



龜山本徳寺に残る太鼓楼。英賀時代、ここから敵対勢力の攻撃をいち早く捕らえ、寺内に太鼓を連呼して防衛の体制をとつた。寺内町英賀の木戸口に置かれた櫓が発展したものと考えられている。城の天守に似ているが、寺内町の要素が城下町でさらに洗練されたものになった。

## 参考文献

- 岩谷教授「播磨信徒の形成について」『講座播磨』第5巻 平凡社  
 知名正寛「美作・備前・備中地域における真宗の移入と展開」『講座播磨』第5巻 平凡社  
 六郷寛「安芸・備後地域における真宗の展開過程」『講座播磨』第5巻 平凡社  
 児玉謙「周防・長門地域における真宗の展開過程」『講座播磨』第5巻 平凡社  
 橋詰茂「四国真宗教団の発展過程」『講座播磨』第5巻 平凡社  
 神楽宣郷「赤松氏・三木氏の文獻と研究」郷土志社  
 西川幸治「蓮如の道・寺内町の形成と展開」『寺内町の研究』第1巻 法蔵館  
 川岡勉「伊予河野氏と中世瀬戸内世界 戦国時代の西国守護 愛媛新聞社山内謙「中世瀬戸内海の旅人たち」『歴史文化ライブラリー』188 吉川弘文館  
 牧野信之助「中世寺内町の発達」『寺内町の研究』第1巻 法蔵館  
 堀新・織田権力の寺内町政策『寺内町の研究』第1巻 法蔵館  
 遠藤博「英賀城図の想定復元 大谷昭」『播州真宗年表』第1版 真宗文化研究会  
 『兵庫歴史』第2巻

# 廟所墓地管理部からのお願い

## 十八年度墓地公益管理費納入のご案内

平成十七年度の墓地管理業務が無事終了いたしました。本年度も同様に墓地内の公共地の維持管理をさせていただきます。つきましては例年同様、同封の振込用紙にて、八月三十一日までにお振り込み下さいますようお願い申し上げます。

## 住所を移転された場合は至急届けて下さい

昨年度の納入率は92%（1659/1798）でした。未納者の大半は転居先不明です。転居される場合は必ず亀山本徳寺墓地管理部（0792-35-0242）に転居先をお知らせ下さい。そのまま放置され、管理料を5年間滞納されると、無縁墓のリストに入り永代使用の権利を失いますのでご注意ください。

## 使用名義者が死亡の場合は至急届けて下さい

亡くなられた方が墓地の使用名義者である場合出来るだけ早く名義の書き換えをして下さい。無縁墓を出さない為にご協力下さい。継承の申請に基づいて新たに墓籍台帳を作成し、墓地使用許可証を発送します。この許可証は、墓地の使用権を証明する唯一のもので、大切に保管下さい。

## 墓地内の工事は必ず指定店に限られています

墓石の工事をされる場合は、必ず指定石材店で施工して下さい。他の業者が指定店であるかのようで見せかけて施工を請負い、発注者が大層迷惑がかかったケースがありますのでご注意ください。また、墓石の拡張には別途永代使用料が必要ですのでご承知おき下さい。

## 整備工事についての報告

近年の集中豪雨に備えて、既に劣化して排水能力の低下していた新規墓地の排水パイプを全域にわたってすべて取り替え、砂利を補填しました。参道の中門の両脇にある石灯籠が傾き危険な状態になっていました。門の柱を修理し灯籠を組直して傾きをなくしました。墓参の通路にあたり

安全を確保することが出来ました。墓域内十一箇所の照明灯や配電盤、鉄製階段や高架橋の塗料が剥げてさびが出ていました。すべて下塗から仕上げまで防錆を施しました。

## 「い地区」上部の崩れた石垣を積み直しました。

新規模地全域排水工事  
墓地全域鉄製構造物  
塗装塗り替え



参道中門前石灯籠積直

「い地区」石垣積み直し



## 個人のお墓に納骨される場合は必ず埋葬届けを提出して下さい。

近年、ご使用の墓地に納骨されるにいたり、廟所管理者の確認のうえに納骨されるケースが発生しております。埋葬届の提出が決められております。所定の法律に基づき、ご記入頂き、必ず廟所管理者にお渡し下さい。管理費は埋葬記録を五年間保証する義務があります。また埋葬記録が管理費で改葬許可の際に被埋葬者の確認が手続が出来ないことになり、法制上の

従って、個人のお墓に納骨される時は、ご面倒でも埋葬届けを廟所管理者（箱本）に提出して下さい。用紙は廟所にあります。ご協力をお願い致します。

## 本徳寺廟所墓地指定石材店

(株)石隆	今宿 1794	93-1483
(有)石屋大吉	広畑区才 853-1	39-3478
(株)大川石材	四郷町山脇 83	52-0345
柏崎石材店	飾磨区御幸 68	35-2087
木村石材店	飾磨区山崎 190-2	36-2257
伸陽造園石材(株)	飾磨区今在家 1066-10	34-5120
高野石材店	飾磨区妻鹿 788	45-1213
八田石材(株)	網干区大江島古川町 120	73-3538
播州石材(株)	大津区恵美酒町 2-81	37-0900
兵庫石材店	青山 3-13-5	66-7084
平野屋石材	今宿 1828-1	94-2988
松原石材	飾磨区須加 296-5	35-1583
毛利石材	白浜町乙 35-1	46-0276
森石材	博労町 74	92-2694
和田石材工芸	南条 1-39	81-6878
117 プラザ・墓石部	宮西町 3-15	24-0117

## (本徳寺廟所墓地管理部)

(様式第9号) 受付日 年 月 日  
受付番号  
受付番号

本徳寺廟所墓地個人墓収骨埋葬届  
(個人墓収骨届)

墓地管理者 宛 本 徳 寺 様  
【墓地、埋葬等に関する法律】並びに「墓地、埋葬等に関する法律施行規則」の規定に従い、「火葬許可証」、「埋葬許可証」、「改葬許可証」を併付の上、下記のとおり収骨埋葬届を提出いたします。

届出番号  
許可証【火葬・埋葬・改葬】番号 埋葬日 年 月 日

埋葬届出者  
氏名 \_\_\_\_\_ 電話番号 \_\_\_\_\_  
住所 \_\_\_\_\_  
氏名 \_\_\_\_\_ 電話番号 \_\_\_\_\_  
住所 \_\_\_\_\_

被埋葬者  
氏名 \_\_\_\_\_ (宗族上の呼び名)  
住所 \_\_\_\_\_  
氏名 \_\_\_\_\_ 電話番号 \_\_\_\_\_  
住所 \_\_\_\_\_  
死亡年月日 年 月 日 所属寺院 宗派 \_\_\_\_\_

墓地使用権者  
住所 \_\_\_\_\_  
氏名 \_\_\_\_\_  
電話番号 \_\_\_\_\_

個人墓の収骨埋葬届については、「墓地、埋葬等に関する法律施行規則」(第8条の1)により届出(墓地使用権及び死亡者の状況を示したもの)の記録の提出が義務付けられています。また、「墓地、埋葬等に関する法律」(第14条の1)で市長局長の発行した「埋葬許可証」、「火葬許可証」または「火葬許可証」の提出が義務付けられています。届出記録を提出する場合は必ず上記のとおり、「火葬許可証」を併付して墓地管理者へ提出して下さい。

これが埋葬届けです。廟所管理部または亀山本徳寺墓地管理部にありますので個人使用のお墓に納骨する際には提出してください。